佐伯史談

第一〇六号

「郷土史研究誌」通算百二十八号

昭和五十一年七月三十一日発行

佐伯史談会

事務所　佐伯市大字福垣字龍護寺　羽柴方

主張

史談会と行動

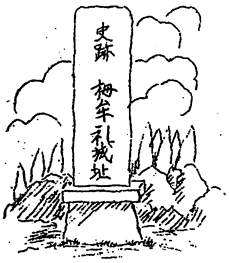
―われわれの志向するところ―

佐伯史談会

副会長　羽柴　弘

早いもので、昭和三十三年三月（この数字は覚えやすい）、龍護寺でスタートした佐伯史談会は、やがて二十周年を迎える。機関誌「佐伯史談」は、百二十八号に達し、会員数も四百を越そうとしている。そして過ぐる十数年の歩みをかえり見て、われながらよくもここまで成長したなあの感が深い。

去る六月二十七日、史談会は寄付も援助も求めずに、今年度経常予算の中で、栂牟礼の古城址に、史跡を示す石碑を建てた。



佐伯氏にゆかり深い龍護寺、毛利氏の庇護の厚かった観音堂の修築も、多数会員の協賛により、力強い推進を見ている。

もう一つ、今年度の目玉行事に、西南の役百周年の慰霊行事がある。まず四月四日、桜咲く三国峠の古戦場を歩き、次の日曜四月十一日には、小西にけぶる直川村の陸地峠に登り、戦没者の現地供養のことを執行した。

また五月五日には、蒲江町波当津のそらの、津島畠山の古戦場を弔った。ここも戦死者が多かった。

まだ宇目町の黒土峠を訪わねばならない。八月か、九月の初めになろう。

そして十月の下旬、佐伯岡ノ谷の招魂所で、墓前慰霊の行事を大々的に行う予定である。

私は、史談会のもっているこのエネルギッシュな行動力を、誇りにしたい。行動しうるこの力を大事に思いたい。史談会のような研究団体では、昔も今も研究活動といえば、とかく一部のものの特殊

本号の内容

表紙　史談会と行動（羽柴　弘）……一
巻頭　栂牟礼と龍護寺（神手院正雄）……二
研究　秋月楊門と賀来飛霞（大熊米治）……七
資料　下直見年代記（曽宮爾吉）……一二
談話　佐伯木炭のおもかげ（青木寿男）……一三
資料　清州佐伯村おぼえ書（大野徳弥）……一九
談話　宮島神社の神事祭（山崎作二）……二三
研究　堅田街道（武）石像（岩田善市）……二五
巻頭　西南の役百周年記念行事……二八
研究　おがふるさと元田誌（山……）……二九
　　まつりごと（……）
随想　酒今昔（浜谷捨夫）……三三
――松山・大三島・宮島研修旅行……三八
其の他　雑報

な研究、とくに入手の文献資料の細密な発表に傾いていた。それも悪くはない。私どもの研究の真面目は、どこまでも現地に即した踏査研究であって、しかもその所(村や集落の方々との対話、ご案内による活きている郷土史の追求にあったと思う。

かつては私どもは、背にリュックサックを負い、足でしらべも充分に、バスを利用し、または自転車をつらねて、近郊をよく歩いたものである。佐伯・南郡界わいはもとより、野津・三重・緒方・竹田、津久見・臼杵・戸次・鶴崎、から、大分・別府は渡り、国東・豊後高田・宇佐も三度位づつ、中津にも日田にも一二度と、実によく歩いている。佐伯史談会は、歩く史談会である。

宮崎県にも二度、四国一周から昨年は北九州を巡った。今年は松山ー大三島を船で渡り、音戸の瀬戸ー広島原爆の址をたずね、岩国ー徳山から周防灘を渡り、竹田津ー宇佐を経て帰るという、例によって二泊三日のバス旅行を計画している。足を伸ばして県外に出れば、全国的な視野に立った歴史が学習材となり、これに伴なう一段と高度な文化戦に接することが出来る。

こうした史談会主催の行事に、会員の参加の多いことは当然であるが、会員一人一人が、自ら、求めてよく勉強をしている。史料の探索、古文書の読解研究、それからとくに郷土資料図書の購入研究!例えば「豊後小藩物語」や「豊後国志」など。また各種の研究会や講習会への出席と、きわめて意欲的である。漁具や生活民具と取組んでいるもの、拓本を手がけているもの、丹念に写真に記録しているものいろいろである。また、本誌にも何篇か出ているように、それぞれの地域の歴史や民俗や文化戦をコツコツとまとめ、発表をしている会員もある。

ローマは一日にして成らない、という言葉がある。佐伯史談会の今日あるのは、そしてこの「佐伯史談」のこれは、昭和三十三年の春以来、十八年間の活動とその積み累ねの結果である。言いかえれば、この十八年間の行動の累積である。もっとも史談会の独自の力でこれだけ出来たことは、一つには佐藤鶴吾や増村隆也両先生がすでに先鞭をつけて居られ、また近田泉・柴田勝実・山田平之丞その他の先生方の庇護があったからである。佐伯の郷土史を開拓し、石垣をとったり道をつけたり、それには前記の方々によって成された。この開拓地を立派な耕地にし、種をまき、草をとり、肥料をして、見事な収穫をあげることが、今の私たちの務めではあるまいか。

私は行動という言葉を用いた。私たちはその地域社会の中で、物知りということに止っていてはならない。物知り面をしていると、必ず敬遠される。そうでなくて私たちは行動をもって地域に奉仕し、実行して社会に寄与しなくてはならない。いい例は梅牟礼城址の碑を建てたことであろう。これとてまだ充分ではない。登山道の整備、頂上に案内板やトガの木の植込及、登山口に案内板を立てること、佐伯市内や郡部の小学校・中学校・高等学校へ、遠足に格好な場所としての推選・紹介など、考えれば私どもが地域社会に寄与する仕事はいろいろと考えられる。

物知り史談会員で止っていてはならない。書斎から外に出て、学び知った郷土の歴史と文化を、今日の地域の人達にも学んでいただき、文化戦を尊重愛護し、とくに労力を提供して、地域社会の利益を願っての奉仕や協力を惜んではならない。

小成に甘んずることなく、思いを大いに行動に持ちこまうではないか。